

3. 岡山県

「使える！サポートブックがあったらいいな」

－教員と保護者との協働から－

岡山県立岡山東養護学校 教諭（特別支援教育コーディネーター） 浜田 敏子
保護者（PTA役員） 近藤 直子

(1)PTA との協働から生まれたサポートブック

①作成のきっかけと作成の時期

本校は、岡山市東部に位置する肢知併設の養護学校である。周りは閑静な住宅地であり、葡萄畑・田に囲まれ JR 駅やバス停からも近い。平成9年に開校、肢体不自由部門と知的障害部門の両部門を併設し、両部門とも小学部・中学部・高等部があり、訪問教育も行っている。5月1日現在の児童生徒数は183名である。

自宅及び施設の入所生が通学しており、帰宅後や休みの日の生活スタイルは様々である。

本校は、地域に開かれた養護学校、センター的機能を有する養護学校を目指してはやくから取り組みをはじめている。学校施設の月一回程度の土曜日開放、夏季休業中のサマーキャンプ二日間の実施、地域の方と一緒に楽しむ夏祭り、学生や地域の方を対象にしたボランティア養成講座等、PTA 活動の一環として様々な活動を実施している。

その様々な活動の中から生まれた「サポートブックがあったらいいな」について説明をする。

まず、本校で実施している土曜日に行う活動の一つとして、「ひがしっ子の集い」がある。これは、4年前、休日に子どもたちに活動の場を提供する目的とボランティア養成の『実習』の場として始まったものである。その内容は子どもたちが楽しい時間を過ごせるように PTA で企画し、「音楽の集い」であったり、「お話の時間」であったりする。その「ひがしっ子の集い」の時に、子どもたちはボランティアと一緒に楽しむ。保護者は、「集い」が始まる前にボランティアに子どもの簡単な配慮点を説明し、それを記入した用紙を担当ボランティアに渡して支援をお願いしていた。しかし、その用紙をそのまま持ち帰ったり、なくしてしまったりするボランティアがいた。また、「集い」がある度に説明し記入をするという手間もあった。

2年ほど前、機を同じくして、本校特別支援教育

コーディネーターは、「サポートブック」の重要性と必要性を感じていた。それは、ちょうど全国的に「個別の教育支援計画」、「個別の指導計画」、「移行支援計画」を保護者や他の機関と連携して考えていこうとする動きが高まり、本校でもすでに試行していた時期でもあった。

これらの動きを受けて、日常の生活の中でももう少し簡単に使え、子どもたちにとっても、保護者にとっても役に立つ、使える物はないか？と PTA 役員と話し合っただけで生まれたのが本校の「*サポートブック」であった。

*サポートブックとは、子ども一人一人に合わせた支援をするための説明書きのようなものである。子どもの特徴や特性、趣味、支援のポイント、コミュニケーションの方法等、具体的に分かり易くまとめたもので、子どもの生活の場の環境を整える一つの方法である。本来の意味から言うと、保護者が学校の先生やボランティアに宛てて作る物であって、形式も書きぶりもそれぞれの子どもの実態に合わせたものであるべきかもしれない。しかし、本校では、保護者と教員とが連携をして作るという形をとっている。

保護者の声

私がサポートブックを意識するようになったのは、今から3年ほど前、我が子が高校生になった頃だったと思います。二十歳になれば障害基礎年金の手続きをすることになるけれど、その手続きの際には生育歴や通院の記録など沢山の書類を書いて提出する必要がある、小さい頃から記録を残していると便利…と先輩保護者から聞いていました。ちょうどその頃インターネットで「サポートブック」の存在を知り、またタイミングよく「岡山市手をつなぐ育成会幼児部会研修会」でサポートブックを利用している方の話を聞く機会もったので、我が子は高校生でしたが事務局として参加しました。サポートブックはどんな障害がある子

どもにとっても、本人の記録として将来必ず役に立つだろうし、支援して下さる人に簡単に本人のことをわかってもらうことができ良いな…と思ったのがきっかけです。

②作成のメンバー

早速、PTAの役員と特別支援教育コーディネーターを中心にサポートブック作成に向けて話を進めた。まず、コーディネーターがサポートブックの試案を作成し、それをたたき台にして、PTAの役員を中心に意見をまとめ修正をするという作業を繰り返す。まず児童用のサポートブックの雛形ができた。

その後、今年度に入って、進路指導の担当教員の意見も取り入れ、生徒用バージョンを作成した。現在は2種類の様式が用意されている。

③作成にあたって配慮した点

- *必要なことは最大限入れ込むが、ベースには、子どもへの温かいまなざしを忘れないものにする。何より、子どもが楽しい時間を過ごせることができるための一助となるようにする。
- *両部門（どんな障害のある子どもにでも）の子どものために使える形式とする。
- *保護者がこれなら書いてみようと思える簡単な書式にする。
- *初めてサポートブックを見る人にわかりやすい書きぶりにする。
- *その都度書き換えや差し替えができればよいように工夫する。
- *まず、一番に保護者が記入をし、次に教員が加筆をして保護者と教員との連携で作成する。

保護者の声（本校の特別支援教育コーディネーターが試作したサポートブックの形式を見て感じたこと）

カラー刷りのカットがあり、そのページには何について書かれているのかが一目で分かるので、インデックスシールを貼ったり目次を作ったりする必要がなくて良いと思いました。また、質問形式なので記入しやすく、記入する側にとっても見る側にとっても使いやすそうだなと感じました。

大きさについては、はがきサイズだったらどこでも入手しやすい『はがきファイル』が利用できて良いなと思いました。

④作成時期や作成の手順

今年度、サポートブックを使用しはじめて、まだ2年目である。本校の児童生徒のものを全員作成するまでにはいたっておらず、希望する保護者の申し

出をまって作成している。

- ア. 新年度のPTA総会で役員がサポートブックの説明をし、希望者は担任に申し出て用紙をもらう。（「支援室だより」（本校コーディネーターが保護者向けに不定期に発行）にサポートブックについて記載し、全家庭と全職員に配布）
- イ. 教職員には、コーディネーターが説明をし、保護者から申し出があった場合の手順表を配布する。
- ウ. 保護者はサポートブックに記入し、担任に渡す。
- エ. 担任は、保護者が記入したサポートブックを基に加筆をし、場合によっては、保護者と相談をして完成。

①保護者

「サポートブックを作るので用紙をください」と担任に申し出る。

②担任

コーディネーターからサポートブック用紙を入手し、保護者へ渡す。

③保護者

サポートブックへ記入する。書きにくいところは、担任に相談する。

④担任

保護者から届いたサポートブックにコメントを書き加えたり、目を通して確認したり、また保護者の相談に応じたりして、※ケースと共に保護者に渡す。

※ケースは、「岡山県手をつなぐ育成会」から保護者研修費としていただいたお金で購入したもの

⑤完成

「ひがしっ子の集い」や「デイサービス等で活用する。保管は、保護者がする。書き換えや書き直し等は、随時保護者が行う。

図1 サポートブック作成の流れ（平成17年度）

これは、現在使用しているサポートブックの一例です。○の後の文章はお家の方が書かれたものです。そして、★の文章は担任の先生が書き加えたものです。協働して作っています。

大きさに合わせて切り取るとはがき用ファイルにちょうどいい大きさです。

名前 (ふりがな) (おかやま とうたろう)

[岡山 東太郎]

こういうふうと呼んでください

[とうたくん]

年齢 13 才 血液型 B 型

学年 中1

緊急連絡先 (携帯など)

[母携帯 : ●●●-▲▲▲▲-◆◆◆◆]

主治医 (記載の必要があれば)

[名前: △△病院 ○○○先生
電話: 086-○○○-□□□□]

 好きな遊び・もの・場所など

○特に嫌いなものはありません。

○一人、狭い範囲でウロウロすることが多いです。気持ちが落ち着くみたい。

★新聞や雑誌・カタログ等を自分から見ることがあります。リラックスしている時かな。

 苦手なこと・きらいな遊び・もの・場所・音など

→  こうしたらもっとがんばれるよ。声かけ・支援グッズなど

○しつこくされること → ○ゆっくり単純な短い言い方や声かけで

★課題など目の前にある事や物は早くすませてしまいたいみたいです。長引くとイライラします。

 ○理解に時間がかか

→  ○少しの間、待って

ります。

○少しの間、待ってください。説明の“つぎたし”をすると混乱します。

★説明には身振りを入れて視覚的に訴えると理解しやすいです。



トイレ支援 (必要・不要)

※具体的に

○済んでから必ず元の場所に戻るとは限らない為、見守りが必要です。

★外出先では位置を確認しておくといいです。自分で確認することもあります。



食事支援 (必要・不要)

※具体的に

好きな食べ物:

嫌いな食べ物:

何でも大丈夫です。



自分の持ち物

(わかる・わからない)

○元々自分の物ならわかります。

○その場で自分の物になったり、選んで自分の物になった時は、最初に説明が必要。(一対一でゆっくり)



自分の名前カード

(わかる・わからない)



★平仮名でも漢字でも大丈夫です。



発作 (ある・ない)

※具体的に

発作を起こした時は、とりあえず () してください

アレルギー (ある・ない)

※具体的に

その他

薬 (ある・ない)

薬の名前 (△△△)

服用 (朝食後 昼食後 夕食後 就寝前)

() 時間おき

(その他)

発語

(ある・ない)

(文章会話・単語のみ)

その他



★初対面の人には、伝わりにくいかもかもしれませんが、挨拶や返事等、よく使う簡単な単語で発語できるものもあります。

文字

(よめる・よめない)

(ひらがな・カタカナ・漢字)

その他

数字

(よめる・よめない)

その他

付 録

これは、ボランティアや支援者が子どもたちとの関わりをスムーズにするためのものです。子どもたちが少しでも安心して楽しく過ごせるよう活用していきたいと思います。

ご協力よろしく願いいたします。

写真

ここには本人の写真

お願い

このサポートブックは、とても大切なものです。こどもたちのプライバシー保護のために、この会終了後に保護者に必ずお返しく下さい。



これは、児童用を書いて使用している子どもの保護者に生徒用バージョンにも書いてもらったサンプルです。児童用と同じく、○は保護者が書いたもの、★は担任が書き加えたものです。

これは、ボランティアや支援者が子どもたちとの関わりをスムーズにするためのものです。子どもたちが少しでも安心して楽しく過ごせるよう活用していきたいと思います。ご協力よろしくお願いたします。

写真

本人の写真を貼ります。

お願い

このサポートブックは、こどもたちのプライバシー保護のために、取り扱いには、十分配慮をしてください。



名前 (ふりがな) (おかやま とうたろう)

[岡山 東太郎]

こういうふうと呼んでください

[おかやまくん]

年齢 18才 血液型 B型

緊急連絡先 (携帯など)

[母 : 〇〇〇-〇〇〇〇-〇〇〇〇]

主治医 (記載の必要があれば)

[名前: □□□□□
電話: 〇〇〇-〇〇〇〇-〇〇〇〇]



プロフィール

(簡単な障害特性や個性等)

(とうたろう)は、

○視覚に訴える支援が有効です。“この後どうなるのか”という説明(見通し)をしてもらえることもありがたいです。

岡山県立岡山東養護学校

(Tel 086-279-3020)

B部門 高等部 3年 在学中



「好きなこと」

好きな活動や余暇の過ごし方は

○何か物を持って自分からうろうろすること

○一人で 落ち着きくこと

★学校ではハンカチを持っています。

10分以上一人ですごせることは、

○新聞・広告・カタログなどがあれば過

ごせる場合もあります。

★写真などがなくても文字だけでも大丈夫です。



「できれば避けたいこと」

こういう活動は本人は嫌い(つらい)です

○しつこく されること

★学校でも、活動の予定を示してもらっています。

次から次へと指示されることは、つらいのです。

こういう言葉は本人は苦手(つらい)です

○説明の“つぎたし”をされること

親としてできるだけやらせたくない活動は

○ 特にありません



トイレ支援 (必要・不要)

※具体的に

○終わって出てきた時に、元の場所に戻って来るかどうかわからないので見守りが必要です。



食事支援 (必要・不要)

※具体的に

○箸で口に運ぶことはできますが見守りが必要です。

大好きな食べ物：特にありません

大嫌いな食べ物：特にありません



自分の持ち物

(わかる・わからない)

○元々の自分の持ち物なら

自分の名前カード

(わかる・わからない)



○漢字でもひらがなでも片仮名でも大丈夫です。





発作 (ある・ない)

※具体的に

○服薬しています。

発作を起こした時は、とりあえず
() してください

アレルギー (ある・ない)

※具体的に

薬 (ある・ない)

薬の名前 (○○○○○)

服用 (朝食後 昼食後 夕食後 就寝前)

() 時間おき

(その他)

発語 (ある・ない)

(文章会話・単語のみ)

その他 (ジェスチャー・サイン・指
さし・カード・実物等)



文字 (よめる・よめない)

(ひらがな・カタカナ・漢字)

その他 一部読めます

数字 (よめる・よめない)

その他 一部読めます

時計 (デジタル よめる・よめない)

(アナログ よめる・よめない)

その他

○指示された時刻を針の位置等で説明されればわかります。

本人からの要求

表現手段

声を出す、言葉でいう、

1~2語程度で言う、指さしをする

大人の手首を持つ、大人の手や服を引っ張る

カードなどの道具を使う ()

その他 ()

☆自分の要求は、このように伝えてくれます。

☆嫌な時は、このようにすることが多いです。

○手を振ります。(イヤイヤという感じで)

☆その他、コミュニケーションの特徴は

大人からの指示

伝達手段

言語で理解できる、単語の理解ができる

文字で書く、ジェスチャーやサイン

指さし、実物を見せる、カード類を使う

その他 (ただし短く単純な言い方)

☆してほしい時は、こうやって伝えます

○短く単純な言い方で

★係活動の仕事等は、手がかりになる文字
カードを提示しています。言葉がけなくても
自分からできます。

☆してはいけないことは、こうやって伝えます。

○はっきりときっぱりと言います。

☆その他

困った時……

パニックについて

☆こういう状況はパニックを引き起こしやすいです

○特にパターンはありません。

☆パニックには、このように対応してください

姿が見えない

☆一人で行きそうな所は、

○トイレ 本屋

☆一人で戻ってくる可能性は

絶対あり得ない たぶん戻らない

もしかしたら戻る たぶん戻る 必ず戻る

独特のくせ・こだわり

☆こんな時にこういうことをします。

☆その場合はこう対応してください

更衣について……

一人で可能

支援が必要

※具体的に

その他

★この形式のサポートブックを使用してみたいと思われる保護者の方へ

- あくまでも、参考例ですので、必要な所だけ使用していただければいいです。
また、子どもたちの実態については、個人差が大きいですから、書きにくい箇所等は、書きやすい表現に変えてください。
- 一度、書いてくださったものは、担任に提出していただき、学校での様子も加味しながら、担任と協力して作成されることをおすすめします。
- また、子どもたちの成長につれて、いろいろ加筆・訂正していただきながらご使用ください。
- 保管はご家庭でお願いします。
- 子どもたちのためによりよいサポートをめざし、家庭と学校とが力を合わせてサポートブックを作りをして、さらには卒業後にも使用可能な形になるように工夫を続けたいと思っています。

(3) サポートブックの改善点

約2年間の使用期間を経て、よかった点と改善点とが浮かんできた。使用している保護者やボランティア、作成に関わった教員の意見をまとめた。

①使用してみてわかったこと

実際に使ってみて－保護者の声

○保護者が記入するだけでなく、昼間の生活を一番知っておられる先生に書き足していただくことで、より正確になっていると思います。障害種別や障害の程度などによって食事・トイレ・装具等で支援の方法が、大きく違うとは思いますが、それを言い出すと大変なので、保護者それぞれが工夫し、必要であれば写真なども利用して独自のページを作ることも必要でしょう。また、お気に入りのおもちゃや絵本等の写真を貼るページがあると本人との会話のきっかけに利用してもらえるかもしれません。

実際に使ってみて－ボランティアの声

○初めて子どもたちに接する時に、留意点等を保護者の方から聞いているだけよりも、このサポートブックがあることで、自分たちも安心することができました。たぶん、子どもたちも安心できたのではないのでしょうか。ただ、持ち運ぶのに不便だったので、そこが工夫されるといいかなと思いました。

母親と一緒に作った教員の声

○母親と一緒に作っていく過程で子どもの苦手なことや好きなことを再確認できました。また、母親としての願いもこちらに伝わってきて母親との関係が深まったように感じます。初めて子どもと接する人のためにわかりやすい表現を選ぶという作業の中で、より子どもに対する支援がはつきりしてきた部分もありました。

②今後の改善点

○作ってみたいとは思ってみたものの、自分だけでは作りにくいという保護者や、何となく面倒だなという保護者のために、来年度は、「サポートブック作成教室」を企画している。PTA総会の後の時間等を利用し、保護者に呼びかけてみてはどうかと考えている。子どものお気に入りグッズや写真を家庭から持参してもらって、特別支援教育コーディネーターをアドバイザー

にして作成する。デジカメやパソコン、プリンター等も用意することで、作ってよかった、簡単にできてよかった、みんなと作って楽しかったというような気持ちを教員と保護者が共有すること。

- 本校の催し物に参加しているボランティアのために、貸し出し用のウェストバッグを用意し、その中にサポートブックを入れて、持ち歩くのに便宜を図ること。
- 生徒用バージョンのものは、卒業後も使用できることを目指している。従って、現場実習の際には、実習先の人に読んでもらい、よりよい支援につなげ、本人の卒業後の生活に使う便利なものにする。
- 子ども自身の立場で書くようにすることで、より子どものためのものという視点が明確になるのではないかと。サポートを受ける子どもがいつもメインになるようなサポートブックにしていこう。

(4) これからのサポートブック

保護者の声

- 普段我が子のことを知らない「外部の人」と活動する際に利用することを最初の目的に考えていましたが、これは「新年度の担任の先生」でも同じことだと思います。高等部の生徒の現場実習でも利用できると思います。また、病院などで子どものことを説明する必要があるときなどの覚え書きとしても便利で、説明漏れをふせぐことができるのではないのでしょうか。
- ファイルの一冊は本人の台帳といえるような生育歴中心の物で、どんどん書き足していく形、もう一冊は、学校用で現在の子どもの様子についてたくさん情報が盛り込まれているもの、というように作っていくといいかもしれません。さらに、利用する場所や目的、相手等により、必要なページだけ抜き出して別ファイルに入れて出かける…こんなことができるようになるともっといいかもしれません。
- 外部の方にみてもらう物ですから、「保護者が書きたいこと」に偏らないよう、「支援する人が知りたいであろうこと」を記入するように気をつける必要があると思います。

本校のサポートブックの取り組みは、「サポートブ

ックを活用することにより、活動への参加の制約が減ったり、安心して活動できることが増えたりしてほしい」という目的のために、保護者と教員とが協働して生まれたものである。

そして保護者も本人も作ってよかった、使ってよかったと思うようなサポートブックを目指して今後も検討を続けていきたい。

そのためには次にあげるような観点が大切ではないかと考えている。

- ア. 公平性：だれでもが公平に利用できること
- イ. 自由度：保護者や本人が付け加えたり、形式を変えたりすることができやすいこと
- ウ. 単純性 簡単に書くことができ、簡潔に読むことができること
- エ. わかりやすさ 読む人にとって必要な情報がすぐにわかりやすく理解できること
- オ. 安全性 活用することにより、危険を未然に防ぐことができること
- カ. 省体力：支援する人が余分な力を入れずに、肩に力を入れずに楽な気持ちで支援できること
- キ. 空間の確保：あらかじめ、どのような空間がその子どもにとって必要かがわかり、支援の見通しがたちやすいこと

実は以上の7つの観点は「ユニバーサル・デザインの7つの原則」(米：ロナルド・メイス氏提唱)なのであるが、同じことがサポートブックにもいえるのではないかと考えて7原則を引用してまとめた。

「年齢・性別・身体的能力・国籍等、人々が持つ様々な特性や違いを超えて、すべての人が利用しやすい、すべての人に配慮した町づくりやものづくりを行っていこう」とするユニバーサル・デザインの考え方は、つまり、「本人が楽になり、支援者が楽になり、保護者が楽になり、障害の違いや特性を超えて、すべての人が安心して地域や学校で生活できるためのサポートブック」の考え方にも通じるのではないだろうか。

例えば、居住地校交流をしている子どもが、居住地校に持参することで、交流の際のきっかけ作りになるというように、本人にとってはもちろん、保護者にとっても支援者にとっても「このサポートブックがあってよかった」というものにしていきたい。

今後、本校では、「サポートブック」が個別の教育支援計画、個別の指導計画、移行支援計画と並び、子どもの地域生活を支援する大切な身近なグッズと

して欠かせないものとなっていくと期待している。

1年ぐらい前からは、地域の学校の教員や本校以外の保護者にも「本校のサポートブック」の取り組みを積極的に紹介している。障害のある子どもたち、保護者、教員、支援者、すべての人が元気に前向きになれる、そんなエッセンスがたくさん詰まっているのが本校のサポートブックなのである。